様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０５５９３・１９Ｋ２０８０１

研究課題名（和文）淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討

研究課題名（英文）The genealogy of Awaji dialects and the reconsideration of the classification of Western Japanese dialects

研究代表者
中澤　光平（NAKAZAWA, Kohei）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・プロジェクト非常勤研究員

研究者番号：９０８２４８０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：淡路方言の系統的位置づけの解明および西日本諸方言の方言区画の再検討のため、西日本各地での方言の現地調査と資料調査を行った。淡路方言については、四国方言と近縁である可能性が高いこと、和歌山方言とも系統的に近い可能性がある結果が得られたが、中国地方の諸方言はこの地域固有の改新と見られる特徴があり、方言区画としては、現時点の仮説として、１．近畿中央部、２．近畿周辺部（四国を含む）、３．中国（雲伯を含む）が想定されるものの、中国地方は議論の余地がある。
関連して、各地の方言の共時的分析も行った。特に、高知県南国方言で文末詞「ガ」による無核化を確認し、その範囲について詳細な調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は系統論に基づく方言区画論を目指し、日本列島におけるヒトの移動史を明らかにしようと試みるもので、関連する他分野にも有用な情報を提供し得る。淡路が四国だけでなく和歌山との方言的に近縁となれば、それをもとにヒトの移動史を構築する必要がある。
各地で伝統的に話されてきた方言は今後数年以内に消失してしまう可能性が高く、話者が健在な今のうちに記録する必要がある。方言話者にとっても、自分たちの言葉のこれまで気づかなかった特徴の発見など、方言の魅力への理解が深まることも予想される。地域振興やアイディンティティの確立としての役割も考えられる。今後、南海道をキーワードとしたイベントの創生などが期待される。

研究成果の概要（英文）：In order to elucidate the phylogenetic position of the Awaji dialect and reconsider the divisions of the Western Japanese dialects, we conducted fieldwork in Western Japan and collected documents of Western Japanese dialects. Regarding the Awaji dialect, it seems closely related to Shikoku dialects, and they are probably genealogically close to the Wakayama dialect. The dialects of the Chugoku region are considered to share some unique innovations. Regarding dialect divisions, as the current hypothesis, 1. Central Kinki, 2. Peripheral Kinki (including Shikoku), 3. Chugoku (including Umpaku) are assumed, but the Chugoku division is controversial.
Besides, we also conducted a synchronic analysis of Western Japanese dialects. In particular, we found the deaccentuation by the sentence final particle "ga" in the Nankoku dialect of Kochi Prefecture, and conducted a detailed investigation of its scope.

研究分野：日本語方言学

キーワード：淡路方言　四国方言　西日本　方言区画論　系統論　南海道　アクセント　方言地図

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語の方言のうち、西日本の諸方言は、北陸方言、近畿方言、中国方言、雲伯方言、四国方言の 5 つに区分される（九州方言を含む場合もある）。淡路方言はこれまで近畿方言に分類されてきた（高橋 1982）が、淡路島南部を中心に四国方言に属する徳島県の方言との共通点も多い。また、中国地方を含む瀬戸内周辺の諸方言と類似した特徴もある一方、和歌山方言との類似も指摘されるなど、その所属がなお不明で、方言分類上未整理な点が多いため、これを明らかにする必要がある。

方言区画は系統関係に基づいてなされるべきもの（東條 1954）だが、実際は八地方区分のような行政区画が重視されており、淡路方言が近畿方言に分類されるのも、淡路が兵庫県に属する点が大きいと思われる。

琉球諸語では不規則変化などの共有改新に基づいて系統関係を明らかにする研究が行われているが、本土方言の系統関係の解明を試みる研究は少なく、特に、琉球で近年盛んな分岐学的手法に基づく研究は、本土方言には適用されてこなかった（五十嵐 2017）。五十嵐（2017）は、日本語・琉球諸語に分岐学的手法を適用し、東日本方言（北陸・三重・滋賀東部を含む）と九州・琉球がそれぞれ単系統をなすことを示したが、西日本方言の系統関係は不明とする。

疑問詞が条件形と結ぶ形式（例：そんなこと誰がすりゃ。）は淡路を含む近畿西南部と中国・四国地方の方言に共通して見られる（「方言文法全国地図」260 図）。この形式が新しく生じたのであれば、近畿西南部方言と中国・四国方言の系統的な近さを示している。

２．研究の目的

淡路方言の系統的な位置関係を明らかにするために、淡路方言に隣接する近畿方言、中国方言、四国方言の西日本諸方言を定義づける特徴の調査および言語学的改新形（分岐学でいう共有派生形質）に基づく方言区画の提唱、精緻化を行うことを目的とする。

2009 年に UNESCO が「消滅危機言語」を発表したように、世界的にもマイナー言語の消滅の危機とその記録・保存あるいは継承が問題となっている中で、日本国内でもアイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の 8 言語が消滅危機言語として認定された。しかし、消滅の危機にあるのはこの 8 言語に限らず、日本各地の伝統方言も消滅の危機にある。伝統方言の記述を行う本研究はそのような消滅危機言語の記録と保存を目指すものである。

３．研究の方法

本研究では、四国、中国地方などの地理的あるいは行政的な区画にとらわれず、分岐学の手法に基づき言語学的な改新形によって方言区画を再整理する。行政的な単位にとらわれない、言語学的観点に基づいた方言区画として都竹（1949）などがあるが（安部 2015）、音韻や文法の特徴に基づく区画論は、方言同士の類似度は示せても系統的な近さとは必ずしも一致しない（五十嵐 2017）。そのため本研究も、単純に共通する特徴によって区画を定めるのではなく、新たに生じたと考えられる改新形に基づいて系統関係を整理する。一方で、五十嵐（2017）が西日本方言の系統関係を不明としたように、改新形に基づいた系統関係の解明には限界がある。

そこで本研究では、分岐学的手法に基づいた系統関係の解明を原則としつつも、必ずしも分岐の順序にはこだわらず、それぞれの方言区画を認定するのに必要な改新形を明らかにすることを目指す。具体的には、近畿方言、中国方言、四国方言などの系統樹を描くことではなく、それぞれの方言区画を定義する要素を明らかにすることを主目的とする。単なる類似度に基づくのではなく、改新形を基準とする点が従来の方言区画論と異なり、系統樹を描くことではなく方言区画の認定を主目的とする点が琉球諸語に利用されている分岐学的手法に基づく系統研究と異なる。

また、系統的な考察を行うためにも、本研究はなるべく共通語化する前の伝統方言を対象とする。伝統方言が保ってきた多くの特徴は今後数年以内にはその姿を消してしまう可能性が高く、話者が健在であるうちに記録を残さなければ、近い将来には方言の実態が永遠に不明なままになってしまう。記録が可能な今のうちに、良質なデータを記録する必要がある。本研究によって得られた言語資料は、記録と保存として、言語資源の多様性の確保のためにも重要である。

４．研究成果

(1) 淡路方言における 3 拍名詞 5 類のアクセント型を見ると、本来の中央式の対応として考えられる H1（HLL）以外の型が現れるものが見られる。

3 拍名詞 5 類に分類されている語を中心に、淡路方言のアクセントを、先行研究による中央式の諸方言のデータとともに示す。

表 1　中央式諸方言における 3 拍名詞 5 類（相当語）のアクセントの対照

語	淡路	京都	中川	祇王	明石	すさみ	徳島	高知
油(ｱﾌﾞﾗ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
五つ(ｲﾂﾂ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
命(ｲﾉﾁ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
柘榴(ｻﾞｸﾛ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
涙(ﾅﾐﾀﾞ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
箒(ﾎｳｷ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
枕(ﾏｸﾗ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
朝日(ｱｻﾋ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
鮑(ｱﾜﾋﾞ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
哀れ(ｱﾜﾚ)	H1	H1	H2	H0	H1	H1	H1	H1
鰈(ｶﾚｲ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
姿(ｽｶﾞﾀ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
錦(ﾆｼｷ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
山葵(ﾜｻﾋﾞ)	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1	H1
襷(ﾀｽｷ)	L2	H1	H1	H1	L2	H1	L2	H1
茄子(ﾅｽﾋﾞ)	L2	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L0
柱(ﾊｼﾗ)	L2	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2
狸(ﾀﾇｷ)	L2	H1	H1	L2	L2	L2	L2	H1
睫毛(ﾏﾂｹﾞ)	L2	H1	H1	H1	L2	L2	L2	L2

（中井 2002 を基に作成）

注目すべきは「襷」～「睫毛」の 5 語である。淡路方言では例外的に L2（LHL）で出るこれらの語は周辺部でもおおよそ L2 で現れている。この傾向は、中央式周辺部のみならず非中央式の地域でも共通している。

表 2　非中央式諸方言における 3 拍名詞 5 類（相当語）のアクセントの対照

語	淡路	広島	志々島	高松	飯野	三本松	伊吹島
油(ｱﾌﾞﾗ)	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
五つ(ｲﾂﾂ)	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
命(ｲﾉﾁ)	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
柘榴(ｻﾞｸﾛ)	H1	H0	H2	H0	H0	H0	H0
涙(ﾅﾐﾀﾞ)	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
箒(ﾎｳｷ)	H1	H0	H2	H0	H0	H0	F0
枕(ﾏｸﾗ)	H1	L2	L2	H1	H1	H1	H1
朝日(ｱｻﾋ)	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
鮑(ｱﾜﾋﾞ)	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
哀れ(ｱﾜﾚ)	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
鰈(ｶﾚｲ)	H1	H1	H2	H1'	H1	H1	H1
姿(ｽｶﾞﾀ)	H1	H1	H2	H1'	H1	H1	F0
錦(ﾆｼｷ)	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
山葵(ﾜｻﾋﾞ)	H1	H1	H1	H1'	H1	H1	H1
襷(ﾀｽｷ)	L2	L2	L2	L2	L2	L2	L2
茄子(ﾅｽﾋﾞ)	L2	L2	L0	H1'	L2	L0	L0
柱(ﾊｼﾗ)	L2	L2	L2	L2'	L2	L2	L2
狸(ﾀﾇｷ)	L2	L2	H2	H1'	H0	L2	L2
睫毛(ﾏﾂｹﾞ)	L2			L2'	L2	H1	L2

広島、志々島は中井（1984）、高松、飯野、三本松は中井（2002）の CD-ROM データ、伊吹島は上野（1985）より。

松森（1997）は、3 拍名詞 5 類のうち、「油」～「枕」を a 群、「朝日」～「山葵」を b 群に分類している。a 群にも b 群にも分類されていない、淡路方言で L2 が観察される「襷」～「睫毛」（x 群とする）を見ると、1 拍目が広母音かつ 2 拍目が狭母音である。それに対し、b 群は 2 拍目が非狭母音か 1、2 拍目ともに狭母音である。このことから、b 群と x 群は音韻条件により分裂したと考えられ、この分裂を共有している方言は系統的に近い可能性があると言える。

淡路方言や徳島市方言、高知市方言は 3 拍 5 類の a 群と b 群の分裂を生じていないが、b 群と x 群に概ね相補分布の関係が見られることから、b 群と x 群が分裂する前に a 群と b 群の分裂が讃岐式と真鍋式だけでなく淡路や徳島市、高知市などでも生じていた可能性を示唆する。

改新的特徴をもとに系統樹を描くと、淡路方言の系統的位置は次のようになる。

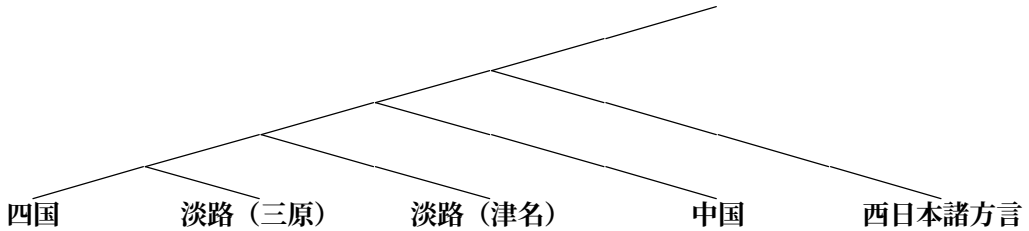

図　淡路方言の系統的位置

この系統樹では、淡路方言という単系統は存在しないことになり、津名郡方言と三原郡方言に分かれ、三原郡方言が四国方言と姉妹関係になる。ただし、淡路方言と四国方言は全体として単系統を為すため、四国に淡路を加えた範囲の方言を新たに「四国方言」（あるいは「四国・淡路方言」）という 1 つの方言区画として認めるべきことを主張する。

「踵」を意味するキキビソなど、淡路方言全体に分布する要素は淡路方言という単系統を認めることを支持するが、これは淡路・四国共通祖語時代の語彙で、四国方言ではその語「キキビソ＞キリブサ」と変化したと考えれば矛盾しない。

(2) 「日本のことばシリーズ」のうち、近畿・中国・四国各地の俚言部分の入力作業を行い、データベース作成のための準備を行った。

表 3　「日本のことばシリーズ」俚言入力データ例（『島根県のことば』）

番	頁	方言形	漢字	品詞	地域	意味
1	194	アイ		名	隠岐・島前	東風。
2	194	アイキョーニン	愛嬌人	名	隠岐・西郷	酒宴席で酒を勧めにぎわす人。
3	194	アイノアサナギ	あいの朝凪	句		東風の朝は凪がよい。
4	194	アエル		動	隠岐・西郷	膿が出る。
5	194	アオクビ	青首	名	隠岐・島前	鴨。
6	194	アオリ		名	石見・邑智	落穂。落籾。
7	194	アカクラ	明暗	名	出雲	薄暮時。
8	194	アクザモクザ		名	隠岐・西郷	善悪取り混ぜたさま。
9	194	ア]ク[バ]ル		動	隠岐・五箇	人の言うことを聞かない。《隠岐・西郷》困る。
10	194	ア]ク[ヘ]タ	悪下手	名	隠岐・五箇	何をさせても下手な人。○シゴトガ　[ア]ク[ヘ]タダ　[ナ]ー。（仕事が下手だなあ。）○[ア]ノヒトワホン[ト]ニ　[ア]ク[ヘ]タダ　[ヨ]。（あの人は本当にアクヘタだよ。）
11	194	アゴ		名	隠岐・島前	飛魚。
12	194	アザ		名	隠岐・島前	墓穴。
13	194	ア[サジ]	浅知恵	名	隠岐・五箇	浅智恵。軽い人。考えが浅い人。
14	194	アザメラ		名	隠岐・島前	あざみ。
15	194	ア[スィナカ	足中	名	出雲	踵の部分がない，足の半ばぐらいまでの長さの短い草履。
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

(3) 本研究の中核をなす淡路方言の記述に関する情報発信のため、論文の英訳の準備を行った。

方言区画論は日本の方言研究初期からのテーマと言ってよく、東條（1927）以降様々な基準に基づく区画が提唱されてきた。その後、ドイツに始まった等語線とその解釈による言語地理学的

な研究が日本にも広まり、『日本言語地図』の作成やそれに基づいた研究が出てきたが、五十嵐（2017）は「マトリョーシカ分布」という等語線の入れ子状の分布を明らかにし、方言の分岐を描くとともに、八丈語と琉球語の位置づけの大幅な変更を行った。本研究課題が対象とする西日本方言は五十嵐（2017）の補完的な意味合いがあり、部分的にではあるが、西日本諸方言の方言区画に変更が必要なことを示す結果となった。また、系統論を軸とする本研究は、日本列島におけるヒトの移動史を明らかにしようという試みでもある。本研究の方言区画に基づいたヒトの流れと、他分野の仮説とに相違点があれば、その解釈、説明が必要になってくる。

＜引用文献＞

安部清哉（2015）「方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究」『人文』13: 21–55.
五十嵐陽介（2017）「共通の改新に基づく分岐学的手法を用いた日本語諸方言の系統分類：南日本語派（琉球を含む）と東日本語派（八丈を含む）の提唱」比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築　第 1 回打ち合わせ・検討会配布資料.
上野善道（1985）「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40–2: 75–179.
高橋顕志（1982）「淡路島の方言」『講座方言学７　近畿地方の方言』253–276.
都竹通年雄（1949）「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語 第 3 巻』.
東條操（1927）『大日本方言地図』.
東條操（1954）「序説」東條操編『日本方言学』1–86.
中井幸比古（1984）「真鍋式アクセントの所属語彙」『言語学研究』3: 81–116.
中井幸比古 編著（2002）『京阪系アクセント辞典』.
松森晶子（1997）「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189: 15–29.
ローレンス，ウエイン（2011）「喜界島方言の系統的位置について」木部暢子ほか編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：喜界島方言調査報告書』115–122.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中澤　光平	４．巻 55-2
２．論文標題 「キキビソ」考	５．発行年 2020年
３．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	６．最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24561/00018938	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Kohei Nakazawa, Akiko Yokoyama
２．発表標題 Stop series in Japonic
３．学会等名 The first meeting of the Academic Year 2020 of the Joint Research Project on “Studies in Asian and African Geolinguistics”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 中澤光平
２．発表標題 日琉諸語の下位分類とアクセント研究
３．学会等名 NINJALシンポジウム 「日琉諸方言系統論の展望」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Nobuko KIBE, Kohei NAKAZAWA, Akiko YOKOYAMA
２．発表標題 Grammatical Relations in Japonic
３．学会等名 The second meeting of the Academic Year 2020 of the Joint Research Project on “Studies in Asian and African Geolinguistics”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 NAKAZAWA Kohei
２．発表標題 How valid is the "merger of accentual classes" for the phylogenetic classification of Japanese dialects?
３．学会等名 B02,Yaponesian genome project
４．発表年 2020年

１．発表者名 中澤　光平
２．発表標題 キキビソ考―方言からみえる音変化の一類型―
３．学会等名 2019年度 第7回 リベラルアーツ研究セミナー
４．発表年 2020年

１．発表者名 中澤　光平
２．発表標題 淡路方言の系統的位置と方言区画
３．学会等名 日本語学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中澤　光平
２．発表標題 岡山県東部方言のアクセントの成立過程
３．学会等名 日本語学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関